

ザンギリ 愚連隊

早乙女貢



ワンギリ愚連隊

乙女貢



江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社

ザンギリ愚連隊^{ぐれんたい}

定価 一三五〇円 (本体一三一一円)

著者 早乙女貢

一九九〇年五月二二日 第一刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二一十二 郵便番号 一一二
電話 (〇三) 九四五一一一 (大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

© Mitsugu Saotome 1990, Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、

文芸図書第二出版部あてに願います。

目次

開化愚連隊	5
雨夜の客	31
女は二度死ぬ	58
旗本狩り	84
幻燈の女	112
横浜妖奇館	138
生首三千両	166
娼妓解放令	193
燃えつきた洋燈 ^{ランツ}	220

装画
装幀

村上
熊谷博人
豊

ザンギリ愚連隊

開化愚連隊

一

戦さがはじまったのは、夜明けである。また山内には暁闇きょうあんが残っていた。小雨が夜を濡らし、時々、見廻りの者の龕燈がんとう提灯ていとうの明りが木蔭をちらちらしているくらいだった。

その少し前である。本營詰の奥野左京は、新吉原の遊廓ゆうかくにいた。かれは輪王寺宮りんおうじのみやの下で、納戸役なんどやくだった。

同輩は三人で、昼夜交替で警衛することになっている。ところが、時間になっても二人は戻って来なかった。

「金谷のあたりで飲んでいるのを見た」

と、いう者があった。

「このごろ錦布きんぷれの巡邏じゆんらが増えている。下手へたに酔っぱらっていると、斬やられるかもしれぬぞ」
その心配もあった。

「錦切れとりの復讐だといって、向うも殺氣立っている。山をおりるときは用心しろ」

天野八郎はじめ、各隊の隊長たちも、そういう指令をまわしていたが、若い隊士たちは山籠りに鬱屈している。酒は山内にあったが、男ばかりの中だし、もう山籠りも三ヵ月にもなるのだ。女の顔を見なければ、やりきれなかった。

「新吉原へゆきやア、みんなモテルぜ」

と、結城七郎が言っていたのを、左京は思いだした。

「彰義隊は料で、強くって、男らしいとき。薩摩っぽうには大金つまれても、身はまかせぬとよ」

「女郎の口説を信じる馬鹿が、彰義隊に多いのかねえ」

「いってみりゃわからあな。モテモテで、からだが保たねえほどよ」

「おい、本気にするぜ」

田所平馬が、そういって身を乗りだした。

平馬は二十三歳、七郎は一つ歳上であり、左京と同年だった。

左京は笑って、

「おい、女郎にモテルのもいいが、御宝蔵のことを忘れるな」

と、念をおしていたのだが、時間になっても、二人とも姿をあらわさないところを見ると、新吉原にいったのかもしれない。

そう思って、左京は山をおりた。

警衛の立場では、うっかり持場は離れられない。が、幸い、万字隊の者で、顔を知っている者

がいた。万字隊は関宿藩の者が二百人あまりで作った隊で、明静院を本部にしていた。菊池常之進という名を憶えていた。

以前、左京が斎藤弥九郎の九段の道場に通っていたころ、何度か逢ったことがある。何かの用で丁度、本坊へ来たのだ。

「一刻ばかり、おれの代りに警固してくれぬか」と、左京は頼んだ。

「いいとも、拙者は遊撃小隊だから、時間はある。早く薩摩の芋どもが攻めて来ないかと待ち兼ねているくらいだ」

腕を撫して、そう大笑した。九段の練兵館では、目録までいったようである。

左京は安心して山をおりた。雨の夜道であった。蓑笠を着て槍を持ったが、万一を慮って拳銃を腰帯にはさんだ。

六連発の蓮根弾倉である。雷管式だから濡れても発火する。坂本の七軒町のあたりで長州の巡邏兵に逢った。七、八人の一隊だった。一人二人だと彰義隊に斬られるおそれがあるので、隊を組んで歩く。

左京は物陰に隠れてこれをやり過した。

新吉原にゆくと、江戸町一丁目のへうつぼ屋へいった。七郎が口に使っていたのである。

「彰義隊の者は来ていないか」

牛太郎に聞くと、五人来ているという。二人の風采を言うとすぐわかった。七郎は大男だ。六尺は超えているし、平馬は小柄ですばしっこい。

「——おう、なんだ、おめえも来たのかえ」

妓を片手抱きにした七郎が吼えた。

田所平馬のほうは、妓の膝枕でうとうととしていた。

七郎の大声で、眠りを醒まされたように、赧らんだ重い臉をあけて、

「——左京かえ、遅かったな、今夜は、お茶挽いている妓はいないようだぜ」と、言った。

「やい、何を寝呆けていやがる。時刻はいつだと思っているんだ」

左京は呆れて、どつかと坐った。

「時刻だって？　へえ、昨日の今ごろだろ」

へらへら笑いながら、平馬はまた、氣持よさそうに、妓の膝枕で眠りに落ちていく。

「おい、起きねえか」

左京は手当りしだいに、傍にあつた酒をばつと、その顔にぶっかけた。

「やッ、冷てえ」

「それで眼がさめたるう。さあ、起きろ、山内へ戻るんだ」

「おいおい、野暮な真似をするなよ」

と、七郎も妓に未練があるらしく、

「まだ一度しか済んじやいねえのだ。このままじゃセガレが納まらねえよ」

「ちえっ、一度すりゃ充分だ。夜明けには、薩長の奴らが、攻めてくるというぞ、こんなところに、うじゃじゃけていて、もし戦さに間に合わなかったら、旗本八万騎の名が廢るぞ」

「もう、とつくに廃つてらァな。お山に一体、何人残っていると思つてゐるのだ。え？ 徳川直参の意地を貫ぬこうとするな、かまはたつたの千人かそこらだ。前將軍の御警固と立ち上つたときア三千はいたはずだ。そいつが、いまじゃ千もいるかどうかだぜ。八万騎が、百分ノ一に滅っちゃ、名譽も誇りもありやしめえ」

「いまさら愚痴るんじゃねえ、百人に一人でも、武士がいるところを見せてやる、その氣持で、山に残つたのではないか」

「そうさ、だから、立派に死んでやる。立派に死ぬためには娑婆ッ氣があっちゃ末練がでるからねえ。酒と女を、たっぷり楽しんで、すっきりしてからだ」

七郎は、妓をその場に押し倒すと、朱い唇を吸つた。

妓はけらけらと笑い声をたて、七郎のからだを抱きしめた。

「主さん、放しませぬえ、死んじゃ、いやッ」

なるほど、これだけモテれば、時刻の経つのも忘れるはずだった。

「わかつた、わかつた。そのつづきは、冥土でやるんだ。さあ、立て」

左京は、七郎の腰のあたりを蹴つた。

「錦布れの動きがおかしいのだ。夜が明けりゃ攻めてくるのは、九分九厘、間違いないねえ。それもあるが、御宝蔵警衛のお役をすっぱかしての女郎狂いで、もし万一のことがあれば、どうする氣だ」

「うむ、そのときは切腹……」

「やい、いい加減にしろ、腹を切るなァ一度つきりだ。てめえの腹は一つしかねえのだ、さあ、

早く帰るんだ」

二人を促して、新吉原を出たときは、まだ、夜の色は濃かったが、山下まで来たときは、もう東の空は紫紺にうすれかけていた。

慶応四年五月十五日の夜が明けようとしていた。

さきに江戸城無血入城した東征総督のいわゆる官軍は、はじめ西郷隆盛の指揮下にあつたが、大村益次郎がやって来てから、指揮権が移ったという。

あくまでも薩長の政権奪取が目的と見る血氣の徳川家臣たちや、譜代大名の遺臣たちが上野へたてこもっているのは、新政府を号する官軍にとっては、邪魔な存在だった。大村益次郎は、上野の鼠を一匹残らず焼殺す、と言って数万の大軍で、上野を囲んだのである。

すでに、この夜、神田川や大川の橋は封鎖され、要所は官軍で固められていた。

薩摩、長州、土佐、肥前、肥後、安芸、筑前、佐土原、大村、阿波等々十指に余る各藩が、大砲、小銃など新式の火器で武装して、上野殲滅を叫んで取囲んでいるのだ。

どの角度から見ても、彰義隊に勝目はなかった。

が、負けるとわかつていながらかれらを、籠城させているのは、旗本の誇りと意地であつた。その心底には、政権を奪うために、あらゆる卑劣な手を使った薩長土に対する憎悪と怨恨がある。

力の均衡が破れたというだけでおめおめ引き下つては、薩長土の暴戾を容認することになる。身を以つてその野望に抗し、負けても、そこで抗戦したという事実が、後世に残る。武士の一分を立てることになる。

それも意地といつてしまえばそれまでだが、放蕩していても、武士だという意識が心の底に残つていた。負けるとわかつていても存念を通すというところに、武士の心があつた。

周防の大島の村医者にすぎなかつた大村益次郎には、その士魂は理解の外だつたらう。

「こつちには、アームストロングがあるけん、上野は木ッ葉微塵じゃ」

そう大言壮語した益次郎の肚裡には、寛永寺をはじめ、由緒ある神社仏閣の豪壮華麗な建物が、徳川という権威の象徴に見えていたのではなからうか。

それを微塵に砕くことで、徳川幕府の権威を払拭することになるという計算もはたらいっていたようである。

二

そのアームストロング砲の重いひびきが、雨に濡れる暁闇の中にひびき、上野の山に火柱が立つたとき、奥野左京らは、屏風坂をあがっていた。

「はじまった！」

七郎が叫んだ。

三人は、顔を見合わせ、それから、一せいに走りだした。

すでに、上野攻撃の布告はでていた。近辺の民家へ立退き勧告もあつて、下谷辺では、大半が立退いていた。

が、その措置は、すでに以前にも何回もあり、今度も、かけ声だけだと多寡をくくっていた者

も多かった。

したがって、山内の隊士の中にも、寝耳に水の狼狽も、少なくなかったようである。攻撃の大砲に応えて、山内からも発砲し、彼我の殷々たる砲声が山内をゆるがした。

三人が本坊へもどったときは、動揺と混乱で、騒然としていた。

坊さんたちは唇まで蒼くして、恐怖の叫びをあげ、右往左往し、隊士たちは、鉄砲をかかえてあるいは走りだし、あるいは、籠手こてを嵌めたり、着込みくみ込み（鎖帷子くわいす）を着るのに、性急すぎて、やり損なったりしていた。

「おい、どうした」

誰かが、混乱の中から声をかけた。

「早く宮のお傍そばへゆけ」

誰であるか確かめる余裕もなかった。御宝蔵の様子を見なければならなかった。

左京は、近くまで来て、菊池常之進の名前を呼んだ。

「菊池、どこにいる」

そのとき、ぐわッと、大音響とともに傍の建物が碎けた。砲弾が命中したのだと知ったのは、のちのことである。そのときは、何が起ったのかわからなかった。爆裂の凄まじい音とふっ飛んだ楼閣の断片が、唸りうなりを生じて落下してきた。

濛もたる煙と散乱の中で、奥野左京は、氣を失った。

どれくらい氣を失っていたかわからない。いや、一度、正氣にかえたようである。でなければ

ば、夢など見るはずはなかった。氣を失っていて、夢を見るなどということはないはずだ。しかし、それが夢であるかどうか、左京には判然としない。

混乱の中であつた。冷たくびしょびしょと降ってくる雨の中で、かれは正氣にかへつたような氣がした。

雨だけではなく、近くに落ちた炸裂音のせい、阿鼻叫喚の渦巻く中であつた。炎が見え、暗灰色に濁つた硝煙と建物を焼く煙の中で、白や赤のしゃぐまが見えた。

（敵だ！）

左京は身を起そうとした。が、自由にならなかつた。どこかが痺しびれていた。しゃぐまは、官軍の隊長のかぶりものである。

長州が白、土佐が赤、薩摩が黒く染めている。遠くから見ても、その色分けでわかる。

彰義隊では、赤を猩々、白を石橋しゃしきょうと呼び、黒は、熊毛と侮蔑的に呼んでいた。

その連中がすでに煙の中に右往左往しているのだ。

「くそ！ 敵が……いつ黒門が破れたのか」

左京は槍を杖にして立ち上つた。

本坊に殺到して来た敵は、薩摩と長州のようであつた。左京は御宝蔵へ走つた。そこそこで斬り合いが始まっている。左京は眼の隅に菊池常之進の顔をちらりと見た。たちまち、煙で隠されている。

御宝蔵の前に、官軍が群れていた。

「くそ、あいつら」

官軍たちは鍵を鉄砲で撃った。昂奮した連中がどつと駈け寄ろうとした。黒毛をかぶり陣羽織を着た大きな男だったが、滑ったように転った。その拍子に、黒毛がおちた。

左京は灌木の蔭からその男をはっきりと見た。

黒毛を拾おうとして手のをのびしたとき、眼があつた。男は何やら喚いた。訛りの強い言葉だつた。薩摩の方言であらう。かれが、腰から拳銃をぬきとるのが見えた。

その怒号は、御宝蔵へ雪崩れこんだ連中には、聞えなかったのだらう。間断ない銃声と砲声中でもあつた。

左京は、これまでだと思つた。

身を転じた。刹那、片膝立てて、拳銃をかまえた薩兵は、齒を剥きだして笑いながら引金をひいた。

左京は左の肩をもぎとられたような激痛をおぼえ、つんのめっている。ばしゃつと、泥水に顔を突っこんだ。

一瞬気が遠くなつた。薩兵がとどめを刺しに来なかつたのは、手応えが充分だと感じたからであらう。それよりも、御宝蔵の中味の方に関心が深かつたのだ。

左京は、泥水の中から顔をあげた。

(逃げなければ)

と、思つた。

が、からだがいうことをきかなかつた。左腕もまるきり利かず、鉛のように重い。左京は齒を喰いしばって、片腕で這つた。顔の半面は血が飛び、泥水と煤で、すさまじい姿だつた。